

アジア研図書館所蔵新聞を使い倒す (アジア研図書館を使い倒す 第3回)

著者	木村 敏明
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア研ワールド・トレンド
巻	210
ページ	71-71
発行年	2013-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003765

アジ研図書館所蔵新聞を使い倒す

木村 敏明

アジ研図書館には世界各地で発行されている新聞が数多く所蔵されていて、私はよく利用させてもらっています。新聞は、もちろんその内容を鵜呑みにすることは危険ですが、上手に利用すれば、世界各地でおきた事件やそれに対する人々の見方を直接知ることのできる貴重な資料です。とりわけ、アジ研図書館では、日本のアジアやアフリカの国々の新聞を読むことができますので、それらの地域に関心を持っている者にとって宝の山にも等しい場所であるといえます。ここでは私のアジ研図書館での新聞の楽しみ方についてお話しさせていただきますと思います。

まず、アジ研図書館一階奥にある新聞コーナーをみてみましょう。そこには、世界各国から届けられた新聞のうち最近のものについて現物が置かれています。言語や文字、紙の質や大きさもさまざまなので新聞をながめているだけで、世界各地の家庭やコーヒーショップでそれらの新聞を手にとっている人々の姿が目に見え、浮かんできるとも楽しい気持ちになります。実際に読むとなると、確かに言語の壁が立ちふさがることもありますが、幸いなことに多くの国では英語の新聞が発行されているので、それを利用してはいかがでしょうか。

新聞では、世界各地の出来事を知ることができただけではありません。日本で起きた出来事が海外にどうみられているかを調べてみるのも

興味深いものです。私は二〇一一年の東日本大震災が同じく大きな地震を経験したインドネシアで、どのように受け止められたかを調べてみたいことがあります。同じ被災国として日本にたいへん同情を寄せるとともに、地震への備えの進んだ日本で起きた悲劇に、人間の能力を超えた神の力をみるような社説や読者の声がしばしばみられた点が印象的でした。

多くの新聞には広告欄があつて、これもみていて飽きません。電化製品や自動車などは今、現地でどのメーカーのどのような製品が売られている、どのくらいの値段であるのか日本にいながらにして知ることが出来ます。海外赴任や出張の前などにチェックされてはいかがでしょうか。特に日曜版などには料理のレシピが載っていることもしばしばあります。これらを利用して見知らぬ国の料理に挑戦してみるのも面白いでしょう。

また、アジ研図書館では古い新聞をマイクロフィルム化して保存してくれていて、これはたいへん役に立ちます。マイクロフィルムという何か面倒な気がするかもしれませんが、アジ研では読み取りの機械も用意されており簡単にみることが出来ます。現物の新聞よりむしろ場所をとらずに便利です。

まず、事前に自分が調べたいと思う地域や年代の新聞の所蔵状況をネットなどで確認しましょう。マイクロフィルムで所蔵されているこ

とが分かったらしめたものです。利用の二日前までに電話かメールで予約を入れておきましょう。あとは当日、受付でフィルムを受け取り、専用の機械でフィルムを画面に映して読むだけです。機械の操作も親切に教えてもらえるので心配ありません。関心ある記事は複写することもできます。

古い新聞記事ならネットで検索できるとか、デジタル化されたデータベースの方が便利だという人もいるかもしれませんが、そのような意見にも一理あります。マイクロフィルムの新聞では、例えばキーワード検索ができませんので、日付順に並んだ新聞を一ページずつめくりながら目当ての記事を探さなければならぬからです。しかし、だからこそ分かることもたくさんあります。マイクロフィルムのページをめくっていくと、その当時の国内外の社会問題や世相についての情報が目に飛び込んできます。ホットだった社会問題、人気を集めていた歌や映画、ファッションや芸能情報、新型の自動車やカメラの紹介など、当時の社会の様子をそこから知ることが出来るのです。目当ての記事だけを探索して拾い出すやり方ではこうはいきません。いわば、マイクロフィルムを通して私たちは当時の社会への「タイムスリップ」を経験することができるのです。調べたい出来事や事件もこうした同時期の背景を知ること、より深く理解することが出来るでしょう。

読者の皆さんも、アジ研図書館の新聞資料を利用して、自分が関心のある地域や時代へのタイムスリップを経験してみたいかがでしょうか。(きむらとしあき／東北大学大学院文学研究科准教授)